

# 魯迅訳・豊子愷訳『苦悶的象徴』の 産出とその周縁

工藤 貴正

## はじめに

魯迅は「『苦悶的象徴』序言」（1924年11月22日付）の最後に次のように書いている。

ここで私は、友人たちの多大なる援助に改めて感謝の意を表しておかなければならない。とりわけ許季猷君（許寿裳——筆者注）には英語を、常維鈞君（常恵——筆者注）にはフランス語を、彼がその上原文から『頸かざり』一篇を私のために訳出し巻末に附せ得たことは、読者の参考に供することにもなった。それから、陶璇卿君（陶元慶——筆者注）がわざわざ一幅の絵を画いてくれたことは、本書が凄艶な新しい装いを施すことになった。

ここで魯迅は、魯迅訳『苦悶的象徴』が友人のかなりの援助により刊行できたことを述べており、その特筆すべき協力者として、昔からの友人である許寿裳以外にも、新たに二人の青年、常恵と陶元慶を挙げている。『魯迅日記』（以下、『日記』と略す）には、1923年8月8日「午後、常維鈞来る、『歌謡』週刊一冊贈られる」と初めて常恵のことが記載され、「『有限の中の無限』訳者付記」（1924年10月17日付）の中では、フランス語ができない魯迅に代ってヴァン・レルベルグの歌を常恵が訳したこと、ボードレールの散文詩も彼に訳してもらおうとしていることが書かれている。

そこで本稿ではまず、魯迅が自己の翻訳書に対しできるだけ多くの読者を獲得し、普及させるための工夫をどのように施したのかを提示する。その工夫の例を魯迅が書籍の構成と装幀にどれだけこだわっていたかに求め、魯迅と常恵、陶元慶との関係或は彼らに対する魯迅の思いを中心に提示する。

次に、魯迅訳『苦悶的象徴』は初版を「新潮社」から1500冊を発行、再版以降第12版まで「北新書局」からおよそ2万2500冊を発行する。魯

迅訳『出了象牙之塔』は、前5版までを「未名社」から9500冊を発行、後5版までを「北新書局」から1万冊以上を発行、前後して計10版でおよそ2万冊が発行されている。このように、魯迅の翻訳書の普及には、「北新書局」を中心とし、「新潮社」や「未名社」という出版社が大きな役割を果たしていた。そこで、ここでは「北新書局」を中心とする出版社業界と魯迅との関わりを提示することで、魯迅訳『苦悶的象徴』の普及の要因を探りたい。

最後に、豊子愷に関する最近の研究から、豊子愷が『苦悶の象徴』にかなりの思い入れがあったことが明らかにされている。しかし、実質的にはほぼ同時に発売された魯迅訳、豊子愷訳それぞれの『苦悶の象徴』は、実際には当時の文壇へ働きかける影響力と実行力の差が、それぞれの翻訳書の出版状況の差となって顕れている。魯迅はかなり意欲的に自らの『苦悶的象徴』の装幀と出版に情熱を注いでいるが、ここではもう一方の豊子愷について、豊が『苦悶の象徴』に出会った当時の状況を提示して、豊の翻訳意図を考察しながら魯迅との違いを理解する一助としたい。

## 一 魯迅訳『苦悶的象徴』の産出とその周縁

相浦杲の許欽文「魯迅和陶元慶」(『新文学史料』第2編、1979年)に拠る検証<sup>1)</sup>、学研版『魯迅全集』の「訳注」におく許欽文「『魯迅日記』のなかの私」<sup>2)</sup>、さらには『魯迅生平史料彙編』「陶元慶」<sup>3)</sup>などがすでに魯迅と許欽文の関係に触れている。『日記』1924年12月3日には、「昼過ぎ、陶璇卿、許欽文来る」と記載されているが、この日が許欽文の推薦で紹介された陶元慶が魯迅に初めて対面した日であった。

以下、魯迅が『苦悶の象徴』を入手した前後から、翻訳『苦悶的象徴』が実際に刊行された1925年3月頃までの期間を『日記』と『魯迅年譜』第2巻(増訂本、魯迅博物館魯迅研究室編、人民文学出版社、2000.9)を参考に、『苦悶の象徴』に関わる記述と、常恵と陶元慶の記述を中心に拾ってみる。

1923年8月8日「午後、常維鈞来る、『歌謡』週刊一冊贈られる」

9月11日と11月30日「常維鈞に手紙を寄せる」

12月12日「螺髯、維鈞、季市、兪芬嬢、丸山に『小説史』を各一冊ずつ贈る」

魯迅訳・豊子愷訳『苦悶的象徴』の産出とその周縁

- 28日「常維鈞に以前借りた小説二種を返す」
- 1924年2月29日「昼過ぎ、北京大学に講義に行く。常維鈞と、北河沿の国学専門研究所（北京大学研究所国学門——『全集』注より）に行きしばし憩う」
- 3月15日「午後、常維鈞に『歌謡』週刊の表紙図案二枚を送る」
- 4月4日「昼過ぎ、北京大学に講義に行く。常維鈞より『歌謡』週刊記念号二冊贈られる」
- 8日「東亜公司に行き、『文学原論』『苦悶の象徴』『真実はかく伴る』各一冊、計五元五角を買う」
- 5月15日「午後、常維鈞を訪ね、一八日の結婚に『太平楽府』一部（二冊）を祝いに贈る」
- 7月5日「馬幼漁、常維鈞に『中国小説史略』下巻一冊ずつ送る」
- 8月28日「午後、常維鈞を来る」
- 9月22日「夜、『苦悶の象徴』の翻訳に着手する」
- 26日「『『苦悶の象徴』訳後三日序』を書く」
- 10月1日「『『自己発見的歓喜』訳者附記』を書く」
- 3日「昼過ぎ、常維鈞に手紙を寄せる」
- 10日「夜、『苦悶の象徴』を訳了する」
- 12日「午後、顧頡剛、常維鈞来る」
- 27日「晩、H君来る、購入してくれた『象牙の塔を出て』『十字街頭を行く』各一冊を渡される計四元二角」
- 28日「昼過ぎ、常維鈞に手紙を寄せる」
- 11月22日「夜、『苦悶の象徴』序言』を書く」
- 12月3日「昼過ぎ、陶璇卿、許欽文来る」
- 4日「午前、常維鈞に手紙を寄せる。……（略）……『苦悶的象徴』を校正する」
- 10日「新潮社に校正稿を送る」
- 12日「東亜公司に行き、……『文芸思潮論』一冊……、計五元二角を買う。……（略）……夜、『苦悶的象徴』を校正する」
- 15日「『苦悶的象徴』を校正する」
- 30日「『苦悶的象徴』の<sup>ゲラ</sup>印稿を校正する」
- 31日「午後、伏園来たりて、小峰宛手紙と校正稿を託す」
- 1925年1月6日「夜、『苦悶的象徴』のゲラを校正する」

- 7日「午後、新潮社に校正稿を送る」  
9日「王鑄宛手紙『『苦悶の象徴』について』を書く」  
10日「常維鈞に手紙を寄せる」  
12日「午後、李小峰に校正稿を送る」  
14日「『『苦悶的象徴』のゲラを校正する」  
15日「午後、小峰に手紙とゲラを送る」  
17日「『忽然想到之二』（『華蓋集』所収）で、『苦悶的象徴』のゲラを校正していて、中国の書物の装幀に不満のあることを記す」  
20日「午後、許欽文、陶璇卿に手紙を出す」  
22日「東亜公司に行き、『近代の恋愛観』一冊、二元を買う」  
25日「日曜、休み。昼食を用意し、陶璇卿、許欽文、孫伏園を招く」  
28日「李小峰に手紙と校正稿及び図版（挿画の銅版——『全集』注より）を送る」  
2月8日「夜、伏園来たりて、小峰宛手紙と校正稿を託す」（恐らく『苦悶的象徴』校正稿の最終）  
18日「『象牙の塔を出て』を訳了する」  
21日「午後、常維鈞に手紙を寄せる」  
27日「昼過ぎ、北京大学に講義に行く。午後、維鈞、品青、衣萍、欽文と小喫茶で閑談する」  
3月7日「午後、新潮社から『苦悶的象徴』一〇冊届く」  
10日「新潮社から『苦悶的象徴』九冊届く」  
16日「『『陶元慶氏西洋絵画展覧会目録』序』を書く」  
18日「有麟来る、欽文、璇卿来る、衣萍来るが、皆会えず」  
19日「陶璇卿、許欽文来る。小座してから、いっしょに帝王廟に陶君の絵画展覧会を見に行く」  
22日「昼過ぎ、璇卿、欽文来る」  
28日「新潮社から『苦悶的象徴』一〇冊届く、……『苦悶的象徴』四冊振鐸、堅瓠、雁冰、錫琛（章錫琛）宛に贈る」

以上のように、魯迅訳『苦悶的象徴』の翻訳から出版を巡って、常恵と陶元慶とは緊密に連絡を取り合っていた経緯が見出せる。特に、1月25日には、魯迅は昼食を持って成すほど、陶元慶には親密感を抱きまた礼儀も

尽くしている。以下、常恵訳『頸かざり』と陶元慶の表紙絵について言及して行く。

#### (一) 常恵訳「頸かざり」について

魯迅が常恵に寄せた手紙の内容を確認したいのだが、最新版『魯迅全集』（全18巻、人民文学出版社、2005年11月）を含めどの版にも、魯迅の常恵宛書簡は収録されておらず、魯迅が『苦悶的象徴』の翻訳着手後に送付した手紙の内容は確認できない。しかし、魯迅は常恵のために労を惜しまず尽力した仕事が、学研版『魯迅全集』17巻『日記』「一九二四年三月一五日の訳注」に以下のように説明される。

『歌謡』週刊は、一九二二年に設立された北京大学研究所国学門の一機関「歌謡研究会」の機関紙（編集者常恵、字は維鈞）で、各地方の歌謡、民間故事、童話、風俗、方言などの紹介をおこなっていた。魯迅がデザインした表紙は、北京大学成立二十五周年を記念した『歌謡』週刊記念増刊号につかわれるもので、この号は月に関する歌謡の特集であった。そのため、魯迅は空色をバックに三日月とそれに少しかかる雲、そして輝く星をちりばめた絵を描いた。題字は魯迅の指定で沈尹黙が書いたが、表紙左上には草書体で「月亮光光、打開城門洗衣裳、衣裳洗得白白淨、明天好去看姑娘」という童謡が書かれていた。北京大学の印刷所には亜鉛版も銅版もなく、職人が木刻で製版をしたためた出来あがりには魯迅の原画とかなりかけ離れていたという（胡從経『拓園草』ほか）。

魯迅と常恵との関係は、常恵が北京大学仏文系に在学中に、魯迅の中国小説史を受講していたことに始まり、上述したように、魯迅は彼の編集する雑誌の表紙図案を画いてあげたり、結婚の祝いを贈ったりするほど親しく、かなり信頼していたことが判断できる。1924年9月22日「夜、『苦悶的象徴』の翻訳に着手」後すぐに、厨川が紹介する短篇『頸かざり』を魯迅が読んでみたいと考え、またこの翻訳書の読者にも読んでもらおうと考え、フランス語のできる常恵に翻訳を依頼したであろうことは、容易に想像の着くことである。このように、魯迅は周りに彼の発想にすぐに応え、支えてくれる人材に恵まれていた。

魯迅訳版『苦悶的象徴』が、豊子愷訳版『苦悶的象徴』との対比におい

て明らかな違いを印象づけるものに、ふくよかな裸婦を赤と黒の2色を基調に図案化した表紙絵と、厨川の原作にすら含まれないモーパッサンの短篇小説『頸かざり』(常恵訳)<sup>4)</sup>の翻訳を加えたことが挙げられる。このことは、編集に工夫を加え、装幀に意匠をこらすという、魯迅の図書作成へのこだわりを我々に看取させる。

原作『苦悶の象徴』「第三 文芸の根本問題に関する考察」の「三 短篇『頸かざり』」は、先ず冒頭に200字程度でこの小説の荒筋が紹介される。それは借り物のダイヤモンドの頸かざりを紛失した夫婦が、弁償し、負債償却のために10年間儉約し、借金を全部返済した時に、実は頸かざりが安価な贗玉であったと知る物語である。厨川はこの第3章第3節で、モーパッサンの作品の分析を「直接体験」と「無意識の心理」というキーワードを中心に、次のように展開する。

- ①造りごとであろうと事実であろうと、直接体験であろうと間接体験であろうと、また複雑であろうが簡単であろうが、現実的であろうが夢想的であろうが、文芸の本質からすれば問題ではなく、問題とすべきは、それが象徴としてどれだけの刺戟的暗示力を持っているかと云う点にある。
- ②この点において、モーパッサンのこの話は入手の手段が問題なのではなく、作家が驚くべき現実性をその描写に与え、巧みに読者を幻覚の境に引き入れて、その刹那生命現象の真を暗示し得た技倆に敬服させられる。モーパッサンの「無意識」心理に在った苦悩が、夢の如くここに象徴化されたればこそ、『頸かざり』一篇は立派な生きた芸術品として読者の胸奥に生命の振動を伝え得るのである。
- ③自分の直接経験でなければ芸術品の材料にはならないと心得るのは誤謬であり、描かれた事象が立派に象徴として成功して居るならば、その作品は偉大なる芸術的価値を持っている。文芸は夢と同じく象徴的表現法を取っているからだ。
- ④禁欲生活を送る坊主の恋の歌や、心理学者の説く二重人格・人格の分裂や、酒に酔っての失言などは、平素は抑圧作用のために無意識の中に押し込められて、意識の表面に現われなかったものである。平素は抑圧せられて無意識の圏内に伏在しているあるものが、純粹創作の文芸創作の場合にのみは、それが表面へ躍り出して自己意識と結び付くからでは無かろうか。

以上に述べる厨川白村の分析の現実感を読者に体現させるための効果として、魯迅は自らの翻訳『苦悶的象徴』の「附録」に常恵訳『頸かざり』を添付したのである。

## (二) 陶元慶の表紙絵について

陶元慶が赤と黒の2色（版により2色から4色）を基調にした表紙絵は「一本の鋼のさすまたが一人の少女の舌をつき刺している。それが所謂“人間苦”の象徴である」<sup>5)</sup>と説明されている。魯迅は、『『苦悶の象徴』序言』（1924年11月22日付）の最後に、「陶璇卿君がわざわざ一幅の絵を画いてくれたことは、本書が凄艶な新しい装いを施すことになった」と書いているが、この他にも、陶元慶と彼の画風について次のように述べている。



陶元慶作・『苦悶的象徴』表紙絵

陶璇卿君は二十数年専心研究してきた画家であり、芸術の修養のために、去年はじめてこの暗褐色の北京へやってきたのであった。今日までに、北京へたずさえてきた作品および新たに制作した作品二十余点が彼の寝室にしまわれているが、誰もそれを知らない——ただし、もちろん彼をよく知っている人々を除いてはである。

その薄暗くしまわれている作品のなかには、作者個人の主観と情緒がいっぱいにあらわれており、とりわけ彼が筆のタッチ、色彩および趣向に対して、どんなに力を尽くし、心を砕いているかを見てとることができる。それにまた、彼がつとに中国国画に秀でた作者であり、それで固有の東洋的情緒がまたおのずと作品のうちから滲みでていて、独特の風格を醸し出している。しかしながら、これはまた決して故意によるものではない。将来、当然ながら神品の域に達するであろう……（以下、略）<sup>6)</sup>。

陶元慶君の絵画展は、北京で見たのが最初である。そのとき、こんな意味のことを言ったと思う。彼は新しい形、とりわけ新しい色で彼自身の世界を描き出す、そして、そこには中国古来の魂——もっと具体的に言えば、つま

り民族性が残されている。

この言葉は、上海でも改める必要はないとわたしは思っている<sup>7)</sup>。

魯迅はこの文章の後、中国には自国3000年来の歴史や尺度から価値を計る「古い桎梏」と世界の同時代的思潮に歩調を合わせ参加しなければ落伍するという「新しい桎梏」があることを述べるが、「陶元慶君の絵画には、この二重の桎梏がない。つまり内と外の両面で、いずれも世界の時代潮流と一つになり、そしてまた中国の民族性を失ってはいないからである<sup>8)</sup>」と、陶元慶の画風をかなり高く評価している。

一方、当時、印刷コストと印刷技術の問題から、出版社はカラー印刷や美術作品の挿画などを収めると費用がかさむと考え、図書の出版の際には、画質には手間を掛けなかったり、目次に挿画の存在が記されるのに実際には抜いてしまう傾向があった<sup>9)</sup>。魯迅はこうした出版社や編集者の対応と、出版社が営業営利重視から勝手に画家と交渉するというやり方に対して、1926年10月29日と11月22日付「陶元慶宛」書簡の中で、次のように語っている。

『彷徨』の表紙はじつに力強く、見る人を感動させます。ところが、話によると、第二版の色は随分違っているとのことで、私は気分を害しています。上海北新の担当者は、こういうことにはまったく無頓着で、なすすべがありません。その第二版を私はまだ見ておらず、ひとの手紙で知らされたのです。(10月29日)

未名社が社の名義で絵をお願いし、それも数日中に書きあげてほしいという事だったそうですが、まったく困った話です。彼らも文学や芸術を研究している以上、これくらいの道理はわかっているかもしれませんが、実際にやっていることがこんなありさまでは、まったく歎かわしい。……(中略)……最近聞いた話では彼らは司徒喬に絵を頼んだということです。

まだ着手していらっしやらなければ、とりやめていただいて結構です。画けていましたら、送ってください。一枚を本の第一頁に使えば、いっそう美しくすることができます。

つぎつぎに絵をお願いするばかりですが、まことに申し訳なく、また感謝しています。(11月22日)



以上の文章からは、魯迅が陶元慶の絵には全幅の信頼を寄せていたことが窺えるし、また、魯迅訳『苦悶的象徴』に彼の絵を表紙に置いたことは、「いっそう美しくする」という美術的効果もかなり意識した自信の装幀の図書であり、出版社の編集者が営業営利重視から陶元慶の絵を欲したように、魯迅自身がかなり書物の普及という観点に配慮した翻訳出版であったことが読み取れる。

### (三) 近代出版業社としての「北新書局」の成長

#### ——「新潮社」「未名社」及び「未名叢刊」との関連

魯迅は『創造季刊』2巻2号(1924.2.28)に掲載の成仿吾「『呐喊』の評論」をきっかけに、かなり意識的に、西洋近代文芸思潮と文芸創作上の流派に対する問題認識を深めようとしていたことが『日記』『書帳』の変化から推測できるということを、筆者は何度か指摘してきた<sup>10)</sup>。そしてこの問題意識が、厨川白村の遺稿『苦悶の象徴』の購入(1924.4.8)→『苦悶の象徴』の翻訳開始(1924.9.22)→『苦悶の象徴』の訳了(1924.10.10)→『苦悶的象徴』の初版(1924.12)→『苦悶的象徴』の実質的販売(1925.3)に見られる、出会いから出版まで1年足らずという反応と対応の素早さに繋がっているとも考えている。ところで、魯迅訳『苦悶的象徴』は扉頁には「初版」が1924年12月に1500冊を5角で市場に流通させたことが、巻末には魯迅が書いた「未名叢刊とは何か、どのようなものとなるのか」があり、その中で、本書が「未名叢刊」の一つとして刊行されたことが記されるが、出版・発行社名がない。ただ、「『苦悶的象徴』広告」(1925年3月10日『京報副刊』初載、所収『集外集拾遺補編』)には、「初版」印行が「北大新潮社代售」であると記される。26年3月の「再版」以降は「北新書局印」と明記されている。これは、上海図書館の蔵書で確認している。また、魯迅は1924年12月段階ではまだゲラ校正をしており、実際に「初版」が発行されたのは1925年3月である。『日記』にも1925年3月7日「午後、新潮社から『苦悶的象徴』一〇冊届く」、10日「新潮社から『苦悶的象徴』九冊届く」、28日「新潮社から『苦悶的象徴』一〇冊届く」とある。「新潮社」、「北新書局」、「未名社」及び「未名叢刊」の関係がやや複雑であるが、魯迅とこの3つの出版社との関係を整理することで、魯迅が中国出版業界の成長にどれだけ寄与し、またどれだけ強い影響力を持っていたかが確認できる<sup>11)</sup>。

### 「新潮社」について

1917年から18年秋にかけて、北京大学の学生傅斯年、顧頡剛、羅家倫、潘家洵や徐彦之等が、新思想を宣揚し、文学活動を展開するための雑誌創刊に向けて会合し、討論してきたが、経済的に困窮しずっと実現しなかった。その後、彼らの考えは北京大学文科学部長の陳独秀の支持を得て、学校が印刷費用を負担することで、出版物を創刊することになった。そこで、多くの執筆者と連絡を取り、1918年10月13日に第1回会議において、年間10期を発行し、5期ごとを1巻とする雑誌『新潮』を創刊することを規定し、顧問には胡適を招いて正式に成立した。『新潮』創刊号は1919年元旦、著名な李大釗や陳独秀などの文章が掲載される。第5期まで出版。その後、五四運動の高潮で大学が休校となり、メンバーもデモ行進に参加するなど編集出版が継続できず停刊。北京大学の授業の再開後の10月1日に第2巻第1期として復刊。11月19日の第1回全体社員大会で『新潮叢書』の発行を決定。20年8月15日の第2回全体社員大会で新潮社を正式な学会とする決議が通過。22年3月の第3巻第2期を以って停刊。

後期の新潮社は、魯迅の影響と指導の下、文芸書を出版することで自力更生することとした。1922年冬、前期新潮社のメンバーの中で、孫伏園、李小峰、宗甄甫たちだけがよく集っては、新潮社をどのようにして再興させるかを相談していた。1922年12月、彼らは魯迅と周作人に意見を求め、文芸書の出版に重点を置くことに決定し、まずは『新潮文芸叢書』（魯迅訳・愛羅先珂原著『桃色的雲』、魯迅『呐喊』『中国小説史略』、謝冰心『春水』など）のシリーズを編集することになった。周作人は元々新潮社の主任編集員であったので、彼にこの叢書の主編になってもらい、孫伏園が原稿依頼、李小峰、宗甄甫は出版と発行の事務を主管し、すべての計画と企画には、できるだけ魯迅の意見を取り入れることにした。簡単な打ち合わせにより、魯迅、冰心、周作人等の翻訳作品集を計6種類選定した。1923年春から24年末までに、新潮社は合わせて12種類の新書を出したが、このことは魯迅の多方面に亘る賛助と切り離すことはできない。経済的な困難を解決するために、魯迅は、印刷費200元を自発的に立替払いしたり、書籍に入れるカラー挿画のために、周建人に頼んで上海商務印書館に印刷原版を作ってもらい北京に取り寄せたりとかなり尽力していた。その上、率先して新潮社の書籍を予約注文し、一度に5冊を購入したりと、さらには、原稿を提供したばかりでなく、この一連の叢書のために、表紙や装幀などを入念に設計したり、すこしも手を抜かず何度も何度も校正したりと、多くの労力と心血を注ぎ、魯迅は後期新潮社に絶大な支持を与えていた。

1924年11月17日、魯迅は『語絲』の創刊を支持し、孫伏園などの関心も『語絲』へと移ったので、新潮社の出版業務は放っておかれるようになってしまう。1925年3月、北新書局が成立し、新潮社の出版業務は北新書局が代行するようになる。

### 「北新書局」について

北新書局は、1925年3月、李志雲、李小峰兄弟によって、北京大学の近くの翠花胡同12号に開設され、魯迅訳『苦悶的象徴』の出版発行をしたその日が開店の日となった。店舗開設当初は、店の入り口には、北京大学の「北」と新潮社の「新」の字を取って名付けた‘北新書局’の額があるだけで、室内には幾つかの木製書籍箱と販売書籍として『呐喊』がただ1種陳列されていただけだった。また、「未名叢刊」もこの『苦悶的象徴』の出版発行の時に正式に成立した。開店後も、魯迅とは常に話し合っただけで指導を受け、新文芸の書籍の出版を主とし、新文化の伝播のために積極的な役割を果たしたので、魯迅は北新創設初期の働きに大いに好感を抱いていた。店舗が北京大学に近かったので、北京大学教授の魯迅、周作人、劉半農、林語堂、孫伏園等が原稿を提供したが、他には、錢玄同、江紹原、章衣萍、王品青、韋素園、馮沅君、兪平伯、顧頡剛、李霽野、張定璜、章廷謙が寄稿した。魯迅の最初の研究書『中国小説史略』（合冊本、1925.9再版）や『小説旧聞鈔』（1926.8初版）などが次々に出版発行されたり、多くの著名作家の寄稿を受けたりと、北新書局の商売は次第に勢いづき、一定の発展を遂げた。

しかし、北新書局は、徐々に商売の発展に力を注ぐようになり、詩歌や戯曲は言うまでも無く、新しい訳者の翻訳はあまり歓迎しなくなった。その頃の状況について魯迅は「韋素園君を憶う」（編末奥付、1934年7月16日、初載『文学』月刊、3巻4号、1934.10、所収『且介亭雜文』）の中で、次のように回想している。

その頃、私はちょうど小型の叢書を2種編集していた。一つは、『烏合叢書』で専ら創作を収録し、もう一つは、『未名叢刊』で専ら翻訳を収め、2種ともに北新書局から出版していた。出版社と読者が翻訳書を嫌うのは、その頃も今もまったく変らなかったので、『未名叢刊』は殊のほか見放されていた。折りしも、素園たちが外国文学を中国に紹介したいと考えていた矢先だったの

で、李小峰と相談して、『未名叢刊』を移して、数人の同人で独自でやることにした。小峰は二つ返事で同意した。そこで、この叢書は北新書局を離脱した。原稿は私たち自身のものだったので、別に印刷費を工面すれば、すぐに始められた。

『日記』の1925年10月18日には「夜、素園、静農、霽野来たる。印刷費二百元を払う」とあるが、「未名叢書」として、未名社が最初に印刷出版したのは、1925年12月初版の魯迅訳・厨川白村著『出了象牙之塔』である。

1926年の「三・一八」事件後、北新書局は国民党政府によって封鎖され、翌27年4月李大釗逮捕、10月にはまた封鎖されるなどの状況の下で、魯迅も北新書局も北京（正式には、北平）を離れ、南下することを余儀なくされた。1925年夏、北新書局はまず上海宝山路宝山里77号に支店を構えたが、26年に、北京から12箱の書籍を運び込んで、新しく上海中心部の棋盤街五馬路口の豫豊酒菜館の階下に販売所、新聞路仁里に編集部を開店させた。その際、上海支店を上海本店に格上げ、北京店は北平楊梅竹斜街に移し支店とした。北京支店はその後、琉璃廠や東皇帝城根と住所を移しながらも、営業を続けた。その後、上海本店も四馬路中市、七浦路288号と市内を転々としている。27年4月に、李小峰は上海本店へ転勤し、北京から上海に移り住むと、その後間もなく魯迅も上海に遣って来たので、魯迅の仕事の取り成しを殆んど彼がして、北新書局は順調に売り上げを伸ばし、商売は大きく発展する。すると今度は、四馬路（現、福州路）353号の杏花楼酒家に店舗を移し、1934年には、杏花楼の西側四馬路369号のビルを丸ごと賃貸し、1階を販売部、2階を卸売・通信販売部及び編集部とした。さらに、西宝興路の源源里には、倉庫と職員用宿舎を設けるなど、やっと出版業としての格好がつくようになった。

### 【印税未支払い問題】

魯迅は、1927年10月3日に到着、以降上海定住後には、北新書局のために『語絲』及び『奔流』の編集にあたっている。1929年夏、魯迅は何度も北新書局に印税に関して、法廷で審問することを要求するが効果がなく、『日記』には、8月12日「午後、張友松、党家斌を訪ね、二人を誘い、弁護士の楊鏗を訪ねる」、13日「友松、家斌来る。晩、二人に楊弁護士を

訪ね、北新書局からの印税取り立ての権限を委ね、その必要経費二百元を支払うように頼む」とあり、その後、14日、15日、16日、23日、24日にも、印税取立てに関する交渉が楊弁護士との間で交わされ、25日「日曜。晴、暑し。昼過ぎ、修甫（党家斌の字——筆者）と共に楊弁護士宅に行く。午後、そこで協議し、印税についての相談がほぼ纏まる。出席者は李志雲、小峰、郁達夫の計五人。雨」とある。さらに、28日には、南雲楼で夕食を共にした際に「食事の終り近く、林語堂、皮肉を言う。すぐ反駁するが、相手も譲らず、鄙相悉く現る」とある。これは、今回の印税問題の請求や訴訟が、北新側は1928年に春潮書局を設立した張友松（魯迅のかつての学生）と党家斌（友松の中学時代の同級生）の挑発によるものだと考えていたことを、林語堂が張友松の名を挙げて言ったのがきっかけで険悪なムードになった、と郁達夫は回想し（郁達夫『回憶魯迅』）、これは「魯迅の誤解に基づく」と周作人に手紙で伝えている。

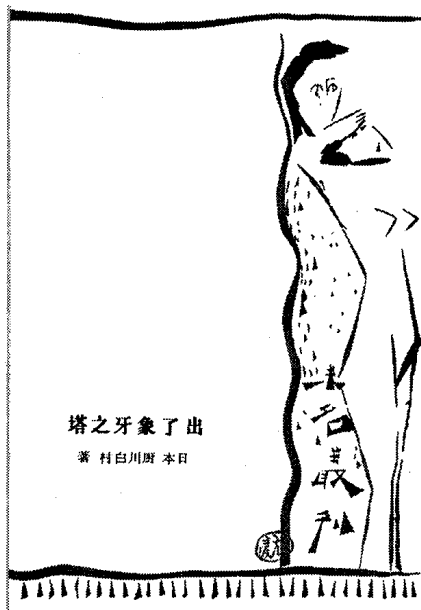
ところで、楊鏗弁護士は、1928年に前後して発布された『中華民国著作権法』と『著作権施行細則』に基づいて次のような調停を行い、双方合意した。

- (1)北新書局は図書の印刷用紙型を魯迅に返却すること（郁達夫、章廷謙（字・矛塵、筆名・川島など）を証人とする）。
- (2)北新書局は長年に亘る魯迅への未支払いの印税を11ヶ月に分けて清算する（楊鏗弁護士が担当する）。
- (3)双方が改めて契約を結び、『著作権施行細則』に拠り、印刷出版の際には、印税印紙の添付を実施する。

協議第(1)項目は、8月28日に実行される。李小峰が紙型を届けに来て、郁達夫、章廷謙が保証人となって、回収費を548元5角と見積もった。第(2)項目は、北新書局は今年度の残り4ヶ月の内に、長期未支払の債務、およそ8300圓（1999年人民元：29万元相当）を魯迅に返済し、さらに、1930年に、引き続き、未支払い印税、およそ1万圓余（40万元余相当）を追加返済している。また、楊鏗弁護士に手数料として、前後して支払われた費用はおよそ4000圓である。

### 未名社と「未名叢刊」について

1925年夏（8月30日——『日記』）、魯迅は来訪した章素園、李霽野、台静農、章叢蕪（素園の弟）等に未名社の設立を提案し、10月18日に魯迅は運営資金と



して印刷費200元を出資（魯迅は計466元1角6分、その他の同人5人韋素園、李霽野、台静農、韋叢蕪、曹靖華はそれぞれ印刷費50元）し、共同して未名社を創設し、北京新開路5号の韋素園のアパートの一室を事務所として活動を始めた。「未名」とは、未だ名前を決めかねているという意味であり、未名社は何の宣言も綱領も規定もなく、魯迅は『中国新文学大系・小説二集』導言の中で、未名社は外国文学作品の翻訳紹介を事業の中心にしたと語っている。その未名社が最初に印刷発行したのが、1925年12月初版の、魯迅訳・厨川白村著『出了象牙之塔』であった。その他に、未名社から出版した魯迅の著作と翻訳は、『墳』『朝花夕拾』『小約翰』がある。

1926年1月10日、『莽原』半月刊創刊され、この年馬神廟西老胡同1号に転居している。『莽原』は計2巻46期を刊行し、27年11月25日で終刊。『莽原』に魯迅は雑文「論“費厄滂頼” 應該緩行」や小説「眉間尺」をはじめ、作品と翻訳合わせておよそ40篇を発表している。

1926年8月魯迅が北京を離れ南下する以前、未名社の査読や編集の仕事は魯迅が主管していたが、南下後は、韋素園、李霽野などが主管した。28年1月10日、今度は『未名』半月刊創刊、計2巻24期を刊行し、30年4月30日終刊。1928年、李霽野が翻訳したソ連の文芸理論の著作『文学与革命』（トロツキー著）を印刷発行して、一部を済南第一師範の未名社書籍刊行物代理販売所に分けて送った。そのために、山東軍閥の張宗昌と北京軍閥張作霖は互いに結託し、張宗昌は張作霖に打電すると、張作霖が前面に立って4月7日の早朝未名社を閉鎖し、李霽野、韋素園などは逮捕された。1週間後、韋素園は病気を理由に出獄するが、李霽野などは人の斡旋、救済により、50日後に釈放された。7月、魯迅は改訂本『墳』の再版と韋素園の訳著『黄花集』の準備をして北京に送り、さらなる未名社の文学事業の発展のために同人たちを励ました。10月、未名社は北京景山東街に出版部と書籍販売所を開設し、また当局に指名手配されていた王青士と李何林を受け入れ、未名社の仕事に参加させた。以降、この書籍

販売所が未名社に身元引き受けの資格を持たせ、当局に検挙されていた共産党員や青年十余名を保釈させる責任を負った。1929年5月、魯迅は上海から母親の見舞いで北京を訪れた際、三度未名社を訪れ、同人たちと仕事の打ち合わせをしたり、西山福寿嶺療養院に肺病の韋素園を見舞ったりしている。1930年以降、李霽野は天津河北女子師範大学で教職に就き、韋素園は病氣療養中のまま、魯迅、曹靖華は北京から遠く離れた。その結果、出版事業は管理が粗雑になり、経済的な大きな損失を生じていた。8月中旬以降、未名社の運営は韋叢蕪に任された。

魯迅は、北京を脱出した1926年8月26日から、およそ2ヶ月後の10月4日の「韋素園、韋叢蕪、李霽野宛」書簡の中で、次のように書いている。

上海滞在のおり、章雪村（「開明書店」の章錫琛のこと——筆者）に会いました。彼は『未名叢刊』を（おそらく上海方面だけで）一手販売したいと言っていました。私はみんなに相談しなければならないから、と言って承諾せず、以後はその話はしませんでした。最近彼から手紙が来ませんでしたか。彼の書店は、たぶん比較的信用できる方です。しかしこの話を承諾すべきかどうかは、やはり北京で決定すべきです。

これをきっかけに韋叢蕪と開明書店の関係は深まるわけだが、叢蕪は、以前から未名社の金を私的に流用したり、数冊の本の版權を開明書店に渡したりして、他の同人たちとの意見や行動の食い違いが益々大きくなっていった。このような状況の下で、韋叢蕪が未名社の名義で開明書店と契約を結び、同人の著訳書の印刷、発行に関する事務を開明書店に委託した旨、このことに関し魯迅にも開明の規定を守るようにとの旨の手紙が届き、魯迅は1931年5月1日「午後、韋叢蕪より手紙、すぐ返信、同時に未名社脱退の声明をする」と反応した。その後その他の同人も前後して離散し、未名社は解体する。

以上の内容に、【資料】の『苦悶的象徴』『出了象牙之塔』の出版年月、出版社、発行部数を考慮に加え、魯迅との関係を中心に、「新潮社」「北新書局」「未名社」及び「未名叢刊」と関係を整理しておくことになる。

①魯迅の第一創作集『吶喊』は、1923年8月初版、12月再版で、北京大学第一院新潮社から出版されている。さらに、魯迅は1920年8月から、

北京大学、北京高等師範学校（後、北京師範大学）、世界語専門学校、北京女子高等師範学校（後、北京女子師範大学）で「中国小説史大略」と題する講義を担当し、油印、鉛印の謄写印刷のテキストを学生に配布していたが、活字印刷にした方が手間が省けるとの理由から、「新潮社」から上・下冊で刊行されたのが『中国小説史略』であった。『中国小説史略』は「上冊」初版が1923年12月に、「下冊」初版が1924年6月に発行されている。そして、25年2月に発行された「上冊」の再版をもって新潮社は経営を終了する<sup>12)</sup>。

②魯迅が金銭、企画、編集などに亘り全面的に支援した後期新潮社にあって、前期新潮社のメンバー孫伏園、李小峰、宗甄甫たちは新潮社の再興を検討していた。その中、李小峰兄弟が1925年3月に北平・北新書局を開店させるが、書局が正式に開店した時に第一番目に扱った書籍が魯迅訳『苦悶的象徴』であった。『苦悶的象徴』初版本には発行年月が1924年12月と記されているが、この12月の段階では、魯迅がまだゲラの校正を行っており、実際、印刷が完了し、出版に漕ぎ着けたのは1925年3月である。しかし、翻訳ゲラの校正を処理しながら、印刷を手がけたのは、25年2月段階でまだ存続していたのは新潮社なので、「初版」印行は北京大学「新潮社」ということになる。ただ、やや疑問が残るのは、魯迅が「『苦悶的象徴』広告」に、「初版」は「北大新潮社代售」と書いている「新潮社代售」という言葉に対してと「北新書局」の正式開店の期日に対してである。「新潮社代售」というのは、魯迅に代わって新潮社が販売したということなのだろうか。また、北新書局の正式の開店が25年3月とされるのだが、『呐喊』第3版が「烏合叢書之一」として、「北新書局」から24年5月に、4501～7500冊までの計3000冊が発行されている。これは、北京大学新潮社という名称の1字ずつ取って名づけた「北新書局」が、実態を失っていた新潮社に替わって、実質的に印刷・出版・発行を行っていたことを物語るものであろうか。だとすれば、『苦悶的象徴』の「初版」の発行年月が1924年12月と記載されるが、出版・発行社は未記載だとすると、「初版」の出版・発行社は北平・北新書局であるとしても間違いではない、と判断される。しかし、ここでは、魯迅が「『苦悶的象徴』広告」に、「初版」は「北大新潮社代售」と書いていることを尊重して、「初版」は北京大学「新潮社代售」としておく。

③北新書局は魯迅著『中国小説史略』（合冊本、1925.9再版、26年11月3版、



27年8月4版、29年1月5版、30年5月7版、31年7月訂正本初版、32年7月8版、33年3月9版、35年6月10版、36年10月11版)や『小説旧聞鈔』(1926.8初版、28年再版)などの他にも、『呐喊』(烏合叢書、1924年5月3版から1930年7月14版まで4万4千冊発行、さらに1937年6月までに24版を発行)、『彷徨』(烏合叢書、1926年8月初版から1931年7月10版までに4万冊を発行、さらに1935年10月までに15版を発行)、『野草』(烏合叢書、1927年7月初版から1936年11月11版まで2万9千冊発行)、『熱風』(1925年11月初版から10版まで発行、但し、全ての版に発行年月、発行部数無し)、『華蓋集』(1926年初版から1933年3月までに8版を発行)、『華蓋集続集』(1927年5月初版から1935年9月まで6版を発行)、『而已集』(1928年10月初版から1931年4月3版までに1万2千冊を発行、さらに1935年10月までに5版を発行)、『三閑集』(1932年9月初版から4版を発行、但し、全ての版に発行年月、発行部数無し)などを次々に出版発行し、魯迅の文壇での地位の確立と共に、北新書局は大きく営業活動を展開して行った。その魯迅と北新書局の間に起ったのが、前述した「印税未支払い問題」であった。北新書局は「未名叢刊」のような、商売にならない翻訳書はその後は避ける傾向にあったが、『苦悶的象徴』だけは例外で、実質的な初版の印刷発行から第12版まで、確かな発行部数が解る第8版までで1万8千冊、これに残り4版を加えると、少なく見積もっておよそ2万4千冊以上を発行している。これは、当時の翻訳書としては破格の発行部数である。

④未名社は出版社というよりは、そこに集ったアカデミズムの人たちに支えられた純文学支援団体としての傾向が強い。そこで、世界文学の翻訳紹介をつかさどる「未名叢刊」を自分たちのお金を出し合っても発行しようとする。そしてその未名社が最初に印刷発行したのが、1925年12月初版の魯迅訳『出了象牙之塔』であった。この『出了象牙之塔』は「未名叢刊」として、1925年12月初版から1930年1月5版までに9500冊を発行している。その後、売れると踏んだ北新書局が、「未名叢刊」の肩書きをはずし、再度、1931年8月初版から1937年5月5版までを発行している。『出了象牙之塔』の総発行部数は最低2万冊は超えている。その他、未名社から同じ「未名叢刊」として発行されたものにフレドリック・ファン・エーデン著・魯迅訳『小約翰』がある。『小約翰』は1928年1月に初版1000冊が、29年5月に再版1500冊が発行されている。また、未名社から出版した魯迅の著作『墳』は、1927年3月に初版が2000冊、1929年に再

版が1000冊発行されたが、1930年4月3版は北新書局に引き継がれ1500冊が発行されている。同じく、『朝花夕拾』は「未名新集」として、1928年9月初版から29年7月3版までの4千冊は未名社が出版したが、1932年8月3版から33年11月5版までの6千冊はやはり北新書局が印刷発行している。

以上のような状況から、魯迅訳『苦悶的象徴』と『出了象牙之塔』の発行部数がそれぞれ最低2万4千冊と2万冊というのは、この2種の翻訳書がいかにか売れ筋の良い図書であったかを窺い知ることができる。また、北新書局が近代的出版業としての体裁を整え、発展していったことに対して、魯迅著作がいかにか貢献していたかということも察知し得ることである。ここに、売れ筋の本を狙って出版しようとした北新書店の思惑と、魯迅が装幀に拘り、美術的意匠を施した著作を読者に提供したいとの企画が一致したことにより、魯迅訳『苦悶的象徴』と『出了象牙之塔』は民国文壇へ人々に普及したと分析できる。

## 二 豊子愷と『苦悶の象徴』との出会いと翻訳・出版までの背景

魯迅『集外集拾遺』の「一九二五年」の項には、「魯迅先生に与うる一通の手紙(王鑄)」(備考)と題するものに、魯迅が返信した「『苦悶の象徴』について」と題される一文が掲載されている。王鑄の書簡では、魯迅が『晨报』副刊に1924年10月1日から「苦悶の象徴」の翻訳を連載(10月31日まで)し、連載初日の1日に「『苦悶の象徴』訳後三日序」で「もともと書名は無かったが、編者(山本修二——筆者注)によって『苦悶の象徴』と名づけられた」と書いていることに対して、すでに『学灯』に民権訳「苦悶的象徴」が連載されていること、それは『苦悶の象徴』の「創作論」と「鑑賞論」であり、厨川自身が生前にすでに『苦悶の象徴』の題目で公刊していたこと、さらに死後刊行の『苦悶の象徴』には「文芸の根本問題に関する考察」と「文学の起源」が収められていることが魯迅に伝えられている。それに対して魯迅は、1925年1月9日付の返信に、「私が厨川氏の文学に関する著作を読んだのは、地震後のことで、『苦悶の象徴』がその最初の本であり、それ以前は決して彼に注目したことはありませんでした」と述べた上で、王鑄が伝えてくれた内容をもう一度自分なりに整理し、さ

らに次のように書いている。

私が翻訳している時に、豊子愷先生にも訳本があり、『文学研究会叢書』の一つとして、現在すでに印刷に付されたと聞きました。先月『東方雑誌』第二〇号を見ましたら仲雲先生訳の厨川氏の文章が一つあり、これが『苦悶の象徴』の第三章でした。今先生からお手紙を頂き、はじめて『学灯』には早くに掲載されていたことを知りました。この本が、わが国の人々に敬愛尊重されていることがはっきりと解ります。現在私が訳しものもすでに印刷に付されていますので、中国には二種類の全訳本があることとなります。

魯迅は、1925年1月9日の段階で、『苦悶の象徴』第1章「創作論」・第2章「鑑賞論」（単行本所収の一部）を翻訳した明権<sup>13</sup>本、『苦悶の象徴』第3章「文芸の根本問題に関する考察」を翻訳した樊仲雲本、そして現に印刷中である豊子愷と自分の2種の全訳本『苦悶的象徴』があることを知っていた。同時に印刷中である豊子愷訳『苦悶的象徴』はかなり意識していたと推定される。

厨川白村著『苦悶の象徴』は、東京改造社から1924年2月4日付初版が白村の死後刊行物として単行出版されて以降、広く普及する。魯迅が24年4月8日に東亜公司以購入したのは、『魯迅蔵書目録』に確認できる24年3月24日付の第50版であろうと推測される。ところが魯迅に較べ、豊子愷は『苦悶の象徴』にかなり早くに出会っている可能性があるかと推測される。それは実は、『苦悶の象徴』の初出が1921年1月1日発行の『改造』3巻1号に掲載されているからであり、この初出「苦悶の象徴」（全8節。単行本『苦悶の象徴』第1章「創作論」の全6節を有す。第2章「鑑賞論」のうち「四 有限の中の無限」「五 文芸鑑賞の四階段」「六 共鳴的創作」が欠如したものを、全体一つにして第7節「鑑賞論」として置く。また、第3章「文芸の根本問題に関する考察」の「三 短篇『頸かざり』」を第8節「余論」として置く）の発刊の時期は、豊子愷がちょうど1921年早春から冬にかけて10ヶ月ほど東京に滞在した日本留学時期に重なっていたからである。例えば、明権（孔昭綬）が入手し、『時事新報』副刊『学灯』に1921年1月16日から22日にかけて連載した「苦悶的象徴」は、『改造』3巻1号の「苦悶の象徴」を翻訳したものである。また、郭沫若、田漢、鄭伯奇、郁達夫等の創造社メンバーが、7月の会の成立に先がけ、この雑誌『改造』版「苦

「苦悶の象徴」の内容をそれぞれが知っていたように、日本に身を置き、文芸問題に関心を寄せる中国人留学生なら、「苦悶の象徴」は当然誰しもが知り得た話題性のある文章だった。すると豊子愷の場合、出会える可能性としては、初出「苦悶の象徴」(『改造』1921.1)がすでに存在していたのだから、そこから数えると、豊子愷訳『苦悶的象徴』の初版刊行(1925.3)には、まる4年の歳月を要していることになる。では、豊子愷は日本留学時に「苦悶の象徴」の存在を認知していたのだろうか。

豊子愷が日本留学した意義を分析した論考を整理すると次のように纏めることができる<sup>14)</sup>。

上海専科師範学校で美術教師を勤めていた豊子愷は、教学上での能力不足を痛感し日本に留学することを決意する。豊子愷が日本に行く目的は西洋美術とりわけ油絵を学習することにあつたが、日本で彼に強い印象を残し、忘れられぬほど深い感動を与えたのは、東京の古本屋で見つけた竹久夢二の最初の著作集『夢二画集 春の巻』(東京洛陽堂、1909.12)であつた。この『春の巻』に描かれた「簡略な毛筆」(寥寥数筆的毛筆 sketch 速写)タッチのコマ絵(草画)は、「造形の美しさを以って私の眼に訴えかけたばかりでなく、詩の趣を以って私の心を惹きつけたのである」(『絵画与文学』1933.12作)。このコマ絵との出会いが、豊子愷を西洋的絵画(modelとcanvas)から東洋的絵画(詩趣と気韻「rhythmとharmony」)へと方向転換させるきっかけをつくった。豊子愷が夢二の絵に見出したのは、「西洋の構図」を「東洋の筆致」で描く「無声の詩」であつた。彼は夢二の『春の巻』に収めた「クラスメート」や「春さめ」等の草画の構図と筆致を模倣しながら、中国伝統の人文画の要素の強い、所謂「子愷漫画」といわれる独特の絵を形成することに成功し、遂には中国近代漫画の鼻祖と称されるのである。

さらに、豊子愷が『苦悶の象徴』を三度に亘って受容したことを指摘、分析する興味深い論稿がある<sup>15)</sup>。

一度目は、「芸術的創作与鑑賞」(初載『春暉』浙江上虞春暉中学校刊、32期、1924.9.16、所収『豊子愷文集』芸術卷一、浙江文芸出版社・浙江教育出版社、1990.9)の中で、白村が芸術鑑賞論を説明するのに描いた図説と同じ図説で説明を加えていた翻訳時期と推定される頃で、竹久夢二の草画に無意識心理から発した共鳴共感の意味を白村理論により理論構築し、夢二受容が白村受容を生み出し、白村受容が夢二受容を決定づけ、さらに絵画から文

学或いは音楽へと興味を広げる受容の段階、二度目は、谷崎潤一郎作・夏丐尊訳「読『縁縁堂随筆』」の「読後感」（1946年4月11日付、初載1946年『中学生』戦時半月刊、所収『豊子愷文集』文学巻2）の中で、「私の文章は正に私の二重人格の苦悶の象徴である」と告白したように、「童心と大人心の葛藤による苦悶」という自己内面の葛藤を通して白村理論に強い共感を示した受容の段階、そして三度目は、抗日戦争期に『護生画集』のような芸術の必要性を疑う意見に対し、白村が述べる「新しき時代の預言者」としての使命感に基づき、絶えず「目前にある現実」ではなく「未来」「将来」のために護生不要論に反論するための理論的根拠として肉付けした受容の段階である。

以上の論考との関係で、本稿では豊子愷と『苦悶の象徴』との係わりを二点に絞って考察する。第一は、楊暁文は「夢二受容が白村受容を生み出し、白村受容が夢二受容を決定づけた」と分析するが、その時期が日本留学中、即ち雑誌『改造』版「苦悶の象徴」に接することで行われたのか、それとも帰国後のことなのかという問題である。第二は、魯迅は「私が翻訳している時に、豊子愷先生にも訳本があり、『文学研究会叢書』の一つとして、現在すでに印刷に付されたと聞きました」と語り、豊子愷が『苦悶の象徴』を翻訳刊行しようとしていることをかなり意識している。一方の豊子愷は魯迅訳『苦悶的象徴』をどう見ていたのか、また、もし魯迅版『苦悶的象徴』を認知していたとすれば、そのことにより自身の翻訳出版に何かしらの配慮があったのかどうかという問題である。

一点目は、雑誌『改造』版「苦悶の象徴」には、第2章「鑑賞論」第6節「共鳴的創作」が欠落しており、楊氏が一度目の『苦悶の象徴』受容として指摘する作品への共鳴を生じる心的経路の「図説」は、この中に収録されている。この1924年6月21日以前<sup>16)</sup>で、『苦悶の象徴』に関する言説は豊子愷の著述からは見つけられない。すると、厨川白村の死後刊行物である単行本『苦悶の象徴』との出会いが、実質的で意識的な豊子愷の『苦悶の象徴』受容であると考えるのが、現在のところ穏当な判断であろう。

二点目の問題を考察するにあたり、『豊子愷年譜』<sup>17)</sup>を参考に、帰国後の豊子愷の居住地と処女出版『苦悶的象徴』刊行までの足跡を以下に簡単に整理しておく。

1921年冬に帰国し、上海専科師範学校に復職すると同時に、上海郊外

の呉淞の中国公学中学部でも図画と音楽の授業を担当する。上海南市三在里に家を借り、よく虹口にある日本商店に出かけては、日本の製品を購入して、精神的な需要を満足させていた。22年初秋、夏丐尊の紹介で今年開学したばかりの浙江上虞白馬湖にある春暉中学に赴任し、図画、音楽、英語の授業の教鞭を執った。夏丐尊の「平屋」の傍に家を建て、住居の四隅には小さな楊柳の木を植えたので、「小楊柳屋」と自称した。『苦悶の象徴』への共感を明示した「図説」を描く「芸術的創作与鑑賞」が、編末に「一九二四年六月二一日、在小楊柳屋梅雨声中」と書いている。24年の年末、上海立達中学の開設準備のため白馬湖春暉中学を離れ上海に向かう。上海立達中学は25年2月1日に正式に創設され、25日から開講されるが、豊子愷は開設資金を賄うために、白馬湖畔の家屋「小楊柳屋」を売り払い、虹口老靶子に校舎用地を借りたり、小西門黄家闕路の元上海専科師範の校舎を借り移ったりと、立達中学の開学にかなり尽力していた。

帰国後、豊子愷が「虹口にある日本商店」に足しげく通った中には、当然、1917年に開店し、29年まで北四川路魏盛里169号という路地裏にあり、29年からは北四川路底の表通りに新店舗を開いた「内山書店」が含まれていたであろう。だが、帰国後の上海居住時期にはまだ未刊の単行本『苦悶の象徴』は入手できない。豊子愷は、単行本『苦悶の象徴』の初版が出る24年2月4日以降、上述の「図説」の提示の6月21日までに、日本書などはほぼ手に入らない白馬湖畔に居たにもかかわらず、日本語版『苦悶の象徴』を入手できたのは、上海の「内山書店」の存在、或いは夏丐尊、朱自清、朱光潜、王任叔などの同僚の存在と助けが大きかったと考えられる。そして、二点目の問題に関しては、『年譜』において豊子愷の足跡を追う限りでは、魯迅や魯迅訳『苦悶的象徴』の影はまったく顕れてこない。恐らく、「文学研究会」の一会員であった豊子愷は、大手出版社である上海商務印書館から、外国文学の翻訳作品を掲載するために存在した「文学研究会叢書」の名義を借りて、自分の処女出版を発行できるということで既に満足していただろうから、本の装幀にこだわったり、その後の売れ行きを慮ったりということはなかったと想像する。ましてこの時期は、絵画から文学へと轉身ないしは興味や関心を拡大させていた時期であり、魯迅版『苦悶的象徴』が試みたような、自分の挿絵を自分の本に添えて「凄艶な新しい装いを施す」などといった配慮はなかったと考えられる。

## まとめ

本稿では、魯迅訳『苦悶的象徴』が1920、30年代の民国文壇で普及した工夫と要因の分析を中心に論を組み立てた。普及の工夫が、常恵訳『頸かざり』を付け加え、陶元慶の表紙絵で装飾したことにある。魯迅の周りには、フランス語のできる北京大学の学生常恵や許欽文に紹介された陶元慶など、魯迅の企画や発想にすぐに応え、支えてくれる人材に恵まれていた。厨川の作品分析だけでは解らない、モーパッサンの短篇『頸かざり』を常恵に翻訳してもらい、附録として置き、さらには、陶元慶の画いたなまめかしい凄艶な美しさの裸婦像を表紙絵として置いたことは、買い手を惹きつけたであろうし、魯迅自身からしても、美術的効果をかなり意識し、装幀にも自信の持てる図書であった。出版社の編集者は、営業営利重視から陶元慶の絵を欲したように、魯迅自身がかかなり図書の売れ行きという観点に配慮した出版物であった、と考えられる。

次に、普及の要因が、魯迅の「新潮社」「北新書局」「未名社」への企画・編集・資金という全面に亘る貢献から勝ち取った出版界での魯迅の存在の大きさにある。もちろん、草創期の新文学を支えた文壇の大御所としての存在とその知名度からであろうが、魯迅の著書は兎に角よく売れている。そのことによって、北新書局は近代的な出版業者の体裁を整え、発展して行くのだが、その中で、魯迅訳『苦悶的象徴』と『出了象牙之塔』も、それぞれ最低2万4千冊と2万冊という発行部数で民国文壇に流通したことは、この2種の翻訳書がいかに売れ筋の良い図書であったかを物語る。ここに、出版社である北新書店の営業重視の思惑と、魯迅の文芸書として美術的意匠を施した良書を読者に読んでもらいたいとする意図が一致したことにより、「北新書局」の出版業者としての成長に伴い、魯迅訳『苦悶的象徴』と『出了象牙之塔』は民国文壇の人々への普及に向けて企画が実現されたものだった。

一方、中国漫画の開祖、文人画家としても知られる豊子愷が、自らの翻訳書『苦悶的象徴』になんらの工夫も施さなかったのは、本書が大手出版社上海商務印書館から出した処女出版物という、まだ、文壇では駆出しの立場に置かれていたからであったろうと推定できる。

注

- 1) 相浦杲「魯迅と厨川白村」(『伊地智善継・辻本春彦両教授退官記念 中国語学・文学論集』東方書店、1983.12/『中国文学論考』未来社、1990.5)において、魯迅の『日記』『年譜』をはじめ、著述のすべてを洗い出し、詳細に魯迅と白村の係わりについて言及している。筆者はこの論考を拠りどころにしたところが大きい。
- 2) 学研版『魯迅全集』17巻訳注・許欽文「『魯迅日記』のなかの私」に拠ると、『日記』の1924年12月3日に、「晴れ。昼すぎ、陶璇卿、許欽文来る」と記されているが、これは、許欽文の妹許羨蘇が、かつて魯迅に、兄の友人に絵の上手な陶元慶(璇卿)という者がいる、と話したことがあった。魯迅は、その話を覚えていて、ちょうど校正中だった『苦悶の象徴』の表紙絵を陶元慶に描いてくれるよう、許欽文に頼んだ。欽文と元慶は同郷同学で、ともに紹興会館に住んでいた。元慶は、魯迅の申し出を快諾し、描いた絵を欽文が魯迅に見せたところ、魯迅はすばらしいを連発し、暇な時に二人で遊びに来るように言ったという。こうしてこの日、初めて魯迅は元慶と会うことになった、と記述している。
- 3) 薛綏之主編『魯迅生平史料彙編』第3輯、天津人民文学出版社、1983.4「北京時代」を扱うこの第3輯には、「北京における魯迅に関わる人物」として「陶元慶」と「常恵」の項目があるので、ここでの文章を中心に他の工具書での記載を補って整理しておく。(学研版『魯迅全集』10巻、「『陶元慶展作品』に題す」釜屋修「訳注」より)
  - ・陶元慶(1893-1929.8.6)、字は璇卿。『魯迅日記』には璿卿とも記される。魯迅と同郷の浙江省紹興の人。許欽文の紹介により、魯迅と知り合い、『苦悶の象徴』(北平未名社、1924年12月初版)、『象牙の塔を出て』(北平未名社、1925年12月初版)、『労働者シェヴィリョフ』(北新書局、1927年6月初版)の翻訳書の表紙絵以外にも、『墳』(北平未名社、1927年初版)、『彷徨』(北平北新書局、1926年8月初版)、『朝花夕拾』(北平未名社、1928年9月初版)、『唐宋伝奇集』(上海北新書局、1927年初版)等の表紙の装幀を施す。浙江台州第六中学、上海立達学園、杭州美術専科学校で教鞭を執る。1929年8月6日、腸チフスにより病逝、杭州西湖の玉泉路上に埋葬された。この時、魯迅は墓地購入資金300元を許欽文に託している。
  - ・常恵(1894-1985)字は維鈞、『日記』では惟鈞とも記す。北京の人。北京大学仏文系に在学中、魯迅の中国小説史を受講。1923年、『歌謡』週刊の編集に加わり同誌の表紙装幀を魯迅に依頼。1924年大学卒業後、北平研究院に就職。広州にいた魯迅から古書の購入を頼まれる。



- 4) 常恵訳『項鍊』(首飾り)と前田晁訳「頸飾」(所収『短篇十種 モウパッサン集』東京博文館、1911年2月/所収『モウパッサン全集』2巻、東京天佑社、1920年)を使って、モーパッサン「頸かざり」の荒筋を紹介しておく。

美しさと愛嬌だけがとりえのマチルド(馬底爾得)は、ロアゼル(路娃裁)という文部省(教育部)勤めの薄給の役人に嫁ぐ。彼女はいつも、贅沢三昧を尽くし、美しい衣裳と高価な宝石・宝玉に身を飾り、人に喜ばれたり、人に羨まれたり、人を惑わしたり、人に追いかけられたりすることを夢見、そうではない自分に心苦しめ、癩癩を起こしながら暮らしていた。ある日、夫は妻を喜ばせるために、文部大臣(教育総長)邸で催される夜会の招待状を苦心して手に入れて帰ってきた。彼女は夫の蓄えの400フランで衣裳は買ってもらったが、身に着ける宝石が無いと貧乏らしく見られるのはいやだと駄々をこねたが、宝石を買う余裕はなく、彼女の友人のフィレスチェ(仏来思節)夫人に頼み、彼女の宝石箱から自らが探しだした立派なダイヤモンドの頸かざりを借りて、夜会に参加した。夜会で、ロアゼル夫人の美しさ、しとやかさ、上品さ、にこやかさは大臣を含めたすべての男たちを魅了し、彼女は酔っては夢中で踊って、幸福の中ですべてを忘れ、一夜の勝利と快樂に酔いしれた。夜会の帰りに、流しの馬車に乗ったロアゼル夫妻は、恐らくはその中でだろうが、借り物の頸かざりを紛失してしまい、借りたものに似た頸かざりを3万6千フランの大金をはたいて購入し、フィレスチェ夫人には事情も話さずに返した。二人は、夫の父の遺産の1万8千フランに、此方から1000フラン、彼方から500フラン、此処で5ルイ、其処で3ルイ、勿論高利貸やあらゆる種類の金貸に関係をつけて工面した借金で、新しい頸かざりを買ったのだった。その後、ロアゼル夫人は貧乏暮らしの恐ろしさを真に体験する。召使は解雇し、住居を変え屋根裏部屋を借り、食器洗い、洗濯、水汲みという勝手働きをし、買い物では値切り、やっと10年で借金を返済した。ロアゼル夫人はすっかり老けて、貧乏世帯の世話女房になっていた。ある日、シャンゼリゼ通り(楽田路)で偶然フィレスチェ夫人に逢い、昔の面影がすっかり消えて彼女とは気づかぬ彼女に、頸かざりを無くしこんな状況になったことをはじめ打ち明けると、あの頸かざりは、500フランの安物だったと告げられるのである。

- 5) 周国偉編「苦悶的象徴」『魯迅著訳版本研究編目』中国現代文学史資料叢書(甲種)、上海文芸出版社、1996.10
- 6) 魯迅「『陶元慶氏西洋絵画展覧会目録』序」、1925年3月16日付、『京報副刊』1925年3月18日(収録『集外集拾遺』)
- 7) 魯迅「陶元慶君の絵画展に際して——わたしの言いたいこと二、三」『時

事新報』副刊「青光」、1927年12月19日(収録『而已集』)

- 8) 注7)に同じ。
- 9) 筆者は拙稿「魯迅と唯美・頹廢主義——板垣鷹穂『近代美術史潮論』・本間久雄『欧洲近代文芸思潮概論』と美術叢刊『芸苑朝華』を中心に」(大阪教育大学『学大国文』46号、2003.3)において、中国における、ワイルド「サロメ」の翻訳における挿画の脱落傾向と、魯迅が語る『近代美術史潮論』の「挿画」の印刷に見る印刷状況の劣悪さ、及び美術叢刊『芸苑朝華』の『落谷虹児画選』の原画との対比に見る印刷技術の未熟さを指摘したことがある。
- 10) 拙稿「魯迅文学と西洋近代文芸思潮」大阪教育大学『日本アジア言語文化研究』9号、2003.2
  - ・拙稿「魯迅と自然・写実主義——魯迅訳・片山孤村著「自然主義の理論及び技巧」及び劉大杰著「『呐喊』と『彷徨』と『野草』」を中心に」『愛知県立大学外国語学部紀要』(言語・文学編)第37号、2005.3
  - ・拙稿「魯迅と表現主義——転換期のプロレタリア文芸論受容を越えて」『愛知県立大学外国語学部紀要』(言語・文学編)第38号、2006.3
- 11) 「新潮社」「北新書局」「未名社」に関しては、注1)の相浦氏の論考を参考に、以下の資料を中心に整理した。
  - ・范泉主編「新潮社」「未名社」『中国現代文学社団流派辞典』上海書店、1993.6
  - ・魯湘元「為版權而鬭争的作家——魯迅為版稅之權而对簿公堂」『稿酬怎樣攪動文壇——市場經濟与中国近現代文学』北京紅旗出版社、1998.1
  - ・陳明遠「魯迅生活的經濟背景——魯迅為版稅而奮鬭」『文化人与錢』天津百花文芸出版社、2001.1
  - ・王建輝「北新書局」『出版与近代文明』河南大学出版社、2006.4
- 12) 周国偉編「中国小説史略」『魯迅著訳版本研究編目』中国現代文学史資料叢書(甲種)、上海文芸出版社、1996.10
- 13) 王成「『苦悶的象徴』在中国的翻譯与伝播」(『日語学習与研究』2002.3)において、王氏は、明権とは孔昭綬の字であると指摘している。王氏に抛ると、孔昭綬(1876-1929)教育家。字明権、号競成。長沙府瀏陽の人。1910年湖南優級師範を卒業。日本法政大学に留学、法学士の学位を取得。1913年湖南第一師範校長に任ぜられ、「明恥」を校訓として、愛国主義教育を行い、「民主教育の先駆」と賞賛されている、と。また、王氏は本考において、魯迅と豊子愷と樊從予の『苦悶的象徴』の文体比較を行ない、魯迅訳が中国語としての誤りを冒してでも、いかに厨川白村の文体に忠実な直訳体であるかを検証している。
- 14) 豊子愷と竹久夢二の關係を中心扱う論稿に以下①②③のようなものがある

り、整理した部分は三者にほぼ共通する。

①西槇偉「漫画と文化——豊子愷と竹久夢二」日本比較文学会『比較文学』36号、1994. 3／②楊曉文「竹久夢二の影を出て——豊子愷と竹久夢二」東方学会『東方学』88号、1994. 7／③陸偉栄「豊子愷と竹久夢二——模倣から生まれた独特の絵画世界」『月刊しにか』12巻6号（通巻136号）2001. 6／④西槇偉『中国文人画家の近代——豊子愷の西洋美術受容と日本』思文閣出版、2005. 4

三者の違いは、西槇氏は豊子愷が有する絵画・文学・音楽等に秀でる伝統的な文人氣質に着目し、夢二のコマ絵に西洋と東洋を融合した「詩趣」性を見出し、④の著書で論説する「気韻生動」に重きを置く中国美術優位論へと傾倒する文人画家の形成のきっかけとして夢二作品を位置づける。楊氏は、豊子愷が夢二の「詩と画を合一した」タッチと構図や含蓄の妙味などの表現手法に影響を受けるとともに、中国文人の「詩中有画、画中有詩」などの伝統的な審美理念や「気韻」などの伝統画論に基づき「子愷漫画」を構築し、さらには、「童心」「仏教的思索」を重視することで夢二の影を飛び出ていくと論じる。陸氏は、豊子愷が受容したのは、美人画に代表されるような夢二の画風ではなく、社会主義運動に係わっていた頃に、その運動の機関紙『直言』に掲載された「白衣の骸骨と女」のような初期夢二の作品を収める『春の巻』に代表される作風であると指摘していることである。

15) 楊曉文「豊子愷と厨川白村——『苦悶の象徴』の受容をめぐって」日本中国学会『日本中国学会報』57集、2005. 10

16) 盛興軍主編『豊子愷年譜』青島出版社、2005. 9

この『豊子愷年譜』には、『苦悶の象徴』の訳文は、かつて『上海時報』に掲載され、その後、文学研究会叢書の一つとして、1925年3月に商務印書館から出版されている、と記されているが、上海図書館での調査では『上海時報』は41年以降の版のみしか確認できない。

17) 注16)に同じ。

※ 本稿では、日本語版を『苦悶の象徴』と記し、中国語に翻訳されたものを『苦悶的象徴』と記している。また、旧字・旧仮名で書かれていた表記を常用漢字・現代かな使いに改め、ルビを省略した。

【資料・厨川白村著作の魯迅訳版本と豊子愷訳版本の出版状況】

魯迅訳版本				
書名 (頁数)	出版年月・版本	叢書名	出版社	発行部数 (価格)
苦悶的 象徴 (147+8)	1924.12、初版	未名叢刊(卷末)	北京大学・新潮社代售	1500(5角)
	1926. 3、再版	未名叢刊(卷末)	北平・上海・北新書局	1500
	1926.10、3版	未名叢刊(卷末)	上海・北平・北新書局	1500
	1927. 8、4版	未名叢刊(卷末)	上海・北平・北新書局	3000
	1928. 8、5版	未名叢刊(卷末)	上海・北平・北新書局	2000
	1929. 3、6版	未名叢刊(卷末)	上海・北平・北新書局	3000
	1929. 8、7版	未名叢刊(卷末)	上海・北平・北新書局	2500
	1930. 5、8版	未名叢刊(卷末)	上海・北平・北新書局	3000
	1931、重印		上海・北平・北新書局	
	無出版日期、10版 無出版日期、11版 1935.10、12版		上海・北平・北新書局	(5角半)
(139) (85/262) (197)	1960. 8、第1版 2000. 1、第1版 2002.12.16、初版 2002.12.26、再版	世界散文名著叢書 軽經典 軽經典	香港・今代図書公司 天津・百花文芸出版社 台北県新店市・正中書局 台北県新店市・正中書局	4000(14元) (200元)
出了象牙之塔 (254+8)	1925.12、初版	未名叢刊(表紙)	北平・未名社	3000(7角)
	1927. 9、再版	未名叢刊(表紙)	北平・未名社	1000
	1928.10、3版	未名叢刊(表紙)	北平・未名社	2000
	1929. 4、4版	未名叢刊(表紙)	北平・未名社	1500
	1930. 1、5版	未名叢刊(表紙)	北平・未名社	2000
	1931. 8、初版		上海・北平・北新書局	2000(9角)
	1932. 8、再版		上海・北平・北新書局	
	1933. 3、3版		上海・北平・北新書局	
	1935. 9、4版 1937. 5、5版		上海・北平・北新書局 上海・北平・北新書局	
(235) (172/262)	1960. 8、第1版 2000. 1、第1版	世界散文名著叢書	香港・今代図書公司 天津・百花文芸出版社	4000(14元)
豊子愷訳版本				
書名	出版年月・版本	叢書名	出版社	発行部数 (価格)
苦悶的 象徴 (105+2)	1925.3、初版	文学研究会叢書	上海商務印書館	
	1926.7、再版	文学研究会叢書	上海商務印書館	
	1932.9、国難後1版		上海商務印書館	(3角半)